早引節用集の分類について

佐藤貴裕

本稿では、近世の早引節用集の分類について私見を述べた。

早引節用集（以下、「早引」と略す）とは、近世後期以降に流布した節用集の一類である。「早引」の名は、特徴的な検索法によるものである。たとえば、『大全早引節用集』（天明八年初版刊）の「凡例」には次のような一節がある（傍訓は適宜略。以下同じ）。

一　此書ノ引ヤウハ門部ニ就テ求メ（ママ）ズ音訓ノ仮名数ニ随テ文字ヲ得ル（以下略）　（東北大学付属図書館蔵文化二年本）

同じく「文字引様」では、より具体的な検索法の説明がある。

威・位・異・居・井・　一声の分
今・家・岩・伊予・　二声の分
祝・委細・色香・　三声の分
慇懃・家土産・　四声の分
厳島・妹背山・　五声の分
余ハこれに准へてよミこへの数をもつてくり出すべし　（同）

つまり、「早引」は、従来の節用集の第一検索法「部」（収載語第一字のイロハ分け）の下に、語の「声」（仮名数。以下、この用語に従う。字数を特定する場合には「一声・二声」などという）の順に語を配列したことに由来している。また、「門」（意味分け）も導入し三重検索とするものもある。これは、明治以降に漸増するもので、近世では数本に過ぎないが、考察の対象とした。

また、『大全早引節用集』では、「増字」と称して増補語を各声の末尾に掲げている。いま、冒頭のイ部一声について例示する。

い一位・位・意・猪・膽・已・／威・夷・藹・亥・胃・増字以・謂・易・為・／異・射・居・井・辰・蟲・違・　（一オ）

これは、『大全早引節用集』に先行する早引（おそらくは、『増字百倍早引節用集』（宝暦十年初版刊））に増補した語を示すものである。もちろん、この「増字」を有しない早引も多い。

また、早引は、山田忠雄氏の『開版節用集分類目録』（以下『目録』と称す）によれば、近世後期以降、他の節用集を圧する勢いで刊行されたことが知られる。明治の節用集も、同氏の『近代国語辞書の歩み』によれば、そのほとんどが早引であったことが知られる。このように広く流布した辞書であるから、当時の言語生活に与えた影響も小さくなかったと思われる。が、早引に関する研究は、山田忠雄氏の業績のほかは、見るべきものが少なく、基礎が開かれ

たばかりだと思われるのである。

古辞書研究の基礎には諸本の分類が欠かせない。ついで、本文の系統の研究が、他の方面からの研究に先行しよう。本文の系統の研究とは、ある本の成立には、どのような先行書の本文を基礎としているかを究明するものである。一書の成立過程を究明する上での基礎的研究と考えてもよい。筆者は、このような見地から、早引本文の系統研究に資する分類とその基準の提出を目的とするものである。本稿は、その第一段階として、従来の分類が早引本文の系統研究にとって有効かどうかを検討するものである。

一　問題と方法

早引の分類としては、冒頭の語「位・伊・以・夷・圮・意」によった『目録』の六分類がある。[1] これは、古本節用集が、冒頭語「伊勢・印度・乾」によって三大別されるのを参照したものと思われる。その古本節用集の三大別には、次のような背景があったことが知られる。

又、古本節用集の諸本に於ける本文最初の語、即、イ部天地門（又は乾坤門）の最初にある語は、「印度」か「伊勢」か又は「乾」であつて、此の三つ以外のものは無い。さうして、此の巻頭の語を同じうする諸本は、所収の語、門の立てやうなどに於いても亦其の特徴を同じうする点があるから、諸本を、先、巻頭の語の異同によって、「印度」本、「伊勢」本、「乾」本の三種に大別し、（以下略）（『古本節用集の研究』四頁）

つまり、冒頭語の異同に、収載語や部立などの特徴の異同が伴うことを三大別の根拠とされているのである。が、『目録』を見る限り、早引の分類は、このような他の特徴との突き合わせを経ていないようである。したがって、従来の早引の分類は、本文の異同を反映しているとは限らない場合も考えられるのである。

しかし、冒頭語の相違が、他本との差を強調しようとした編者の意識を反映しているという考え方がある。[2] これにしたがえば、冒頭の相違に着目した従来の分類も理論的な根拠を有し、本文の異同を反映していると見て大過ないことになろう。が、逆に、冒頭の語を差し替えることによって、新編集の本であるように見せることもできる。特に、古本節用集とは異なり、近世の節用集は多くが営利目的の出版によっているため、利潤を追求するあまり、杜撰な編集が行われるとも考えられるのである。

したがって、検討すべきことの第一は、このような「冒頭語の性格」に着目した分類法が早引でも成り立つか否かであり、第二には、実際に本文の相違に着目した分類を提示し、従来の分類との相違を明らかにすることであると思われる。

ところで、このような「冒頭語の性格」は、古本節用集の場合、狭義の冒頭（巻頭）に限らず、「門」の冒頭にもあてはまるとされている。[3] 早引に応用すれば、各「声」の冒頭にもあてはまることとなろう。よって冒頭語（狭義）の相違が早引本文の相違を反映していれば、各部一声の冒頭語の異同も伴うことが考えられる。少なくとも、同類の本（狭義の冒頭語が一致する本）同士での各部一声冒頭語の一致数は、異類の本との一致数よりも大きいであろう。そこでまず、冒頭語による分類と各部一声冒頭語の異同とを検討するこで、『目録』の分類の有効性を確認していきたい。具体的には、各部一声の冒頭語の一致数を総当たり式に調査し、同類本間での不一致・異類本間での一致の度合いを検討することになる。なお、調査した本は、『目録』の三四種のうち二八種、これに『目録』に記載のない二種を加え、表一の三〇種となった。

表一　調査した早引節用集一覧

	目録番号	書名（内題。／まで角書）	刊年	備考
位類①	四〇二	増補改正／早引節用集	宝暦7	寛政7・角書明朝体
②	四一四	増補早引いろは節用集	―	安政年間本
③	四一六	明和新編／早引大節用集	明和8	
④	四二一	増字百倍／早引節用集	宝暦10	安政5
⑤	四四四	掌中／早引節用集	天保14	文久2
⑥	四四七	訂正早字引	天保14	刊記欠
⑦	四五二	懐宝／数引節用集	天保15	
⑧	四五六	大全早引節用集	天明8	文化2本
⑨	九〇三	新増／早引節用集		
伊類⑩	四七五	嘉永早引節用集	安政2	
⑪	四七七	早引節用集		
⑫	四七九	真草両点／いろは節用集	―	
⑬	四八一	早引節用集	―	
⑭	四八八	早引節用集	文久1	
⑮	四九〇	万世早引／増字節用集	嘉永6	
⑯	四九三	大全早字引節用集	文久3	
⑰	四九五	増補二体／早引節用集	天保14	文久3本
⑱	四九六	早引通字節用集	天保13	
⑲	五〇〇	手形証文／用文早引節用集	嘉永7	
⑳	五〇三	字宝早引節用集	慶応2	
以類㉑	九〇二	萬寿早引節用集	安政4	
㉒	五一四	早引節用集	文久1	
㉓	五一六	増字百倍／懐宝節用集	天保14	
㉔	五一七	増補数引／いろは節用集	―	落丁あり
㉕	五一九	増補音訓／大全早引節用集	嘉永4	薄様・一冊本
夷類㉖	五二一	十三門部分音訓正誤／いろは節用集大成	文化13	門別あり
㉗	五二五		天保14	門別あり
圮類㉘	五二九	早引／永代節用集	嘉永2	二冊本・門別あり
㉙	五三四	早引／萬代節用集	文化6	
意類㉚	五三七	世用万倍／早引大節用集		

※『目録』番号・刊年は初版のものとした。『目録』番号の九百代は、『目録』に記載のないものである。

※各本の所属は、㉘㉚が東北大学付属図書館狩野文庫、①が柴田雅生氏、⑨⑭⑳が筆者である。他は東北大学付属図書館。

二　従来の分類と各部一声の冒頭語の検討

調査の結果を示したのが表二（各欄上段）である。ここでは、諸本の四四部乃至四七部の一声冒頭語の一致数をそのまま掲げている。なお、表下部の注も参照されたい。

おおむね、同類本の間では高い一致数を示しているようである。しかし、位類の①増補改正早引節用集・②増補早引いろは節用集などは、同類との一致数はほとんどが二〇未満であって、稀にそれを超える場合があるに過ぎない。ことに②は、位類であるにもかかわらず、伊・以類（⑩～⑬㉑㉘など）との一致数が高い。また、⑰大全早字引節用集・⑱増補二体早引節用集などは、伊類であるのに位・以類（特に⑦⑧㉔～㉖）との一致数が極めて高いものとなっているのである。このような現象は、比較の範囲を同類内の本同士とする限り、先に触れた「冒頭語の性格」を考慮すれば、改変意識あるいは実際の編集の程度を反映しているためだと捉えられるかもしれない。しかし、異類の本との間でより高い一致数を示すのだから、改変意識はともかく、実際の編集の程度差を反映しているとは考えにくい。また、各部二声の冒頭語を調査しても、同様のことが認められる（表二各欄下段参照）。よって、この調査による限り、冒頭語

表二　諸本間の冒頭語の一致数（各欄上段は一声、下段は二声）

		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
位類	②	19 12																												
	③	16 25	17 10																											
	④	11 14	18 8	28 27																										
	⑤	9 16	28 6	22 21	34 34																									
	⑥	10 11	8 7	6 12	10 22	11 16																								
	⑦	11 17	18 8	28 25	44 43	34 34	10 23																							
	⑧	12 18	18 8	28 25	43 41	34 34	10 21	43 42																						
	⑨	9 16	28 6	22 21	34 34	44 44	11 16	34 34	34 34																					
		①位	②位	③位	④位	⑤位	⑥類	⑦類	⑧類																					
伊類	⑩	9 2	30 20	16 4	22 21	32 2	9 6	22 21	23 2	32 2																				
	⑪	8 1	32 30	15 6	20 4	30 2	9 5	20 4	19 4	30 2	45 30																			
	⑫	8 2	32 32	15 7	20 6	30 3	9 4	20 6	19 6	30 3	45 30	47 41																		
	⑬	9 3	31 26	16 8	22 7	32 4	8 8	22 7	21 8	32 4	45 20	44 28	44 32																	
	⑭	9 6	28 4	16 6	23 10	33 8	8 7	23 10	22 10	33 8	43 3	40 3	40 2	43 11																
	⑮	9 7	28 5	16 8	23 11	33 9	8 7	23 11	22 12	33 9	43 2	40 2	40 3	43 11	44 42															
	⑯	8 7	27 5	17 8	24 11	32 10	9 9	24 11	24 11	32 10	41 3	39 4	39 3	42 11	43 40	43 41														
	⑰	9 15	17 8	26 25	42 39	32 33	9 18	42 40	43 41	32 33	23 3	20 4	20 6	22 7	23 10	23 11	25 11													
	⑱	9 15	17 8	26 25	42 39	32 33	9 21	42 40	43 41	32 33	22 3	20 4	20 6	22 7	23 10	23 11	24 11	44 44												
	⑲	6 15	25 8	11 23	17 42	27 34	8 20	17 41	20 40	27 34	36 3	36 4	36 6	37 7	35 9	35 9	36 10	18 38	18 38												
	⑳	10 9	19 8	22 15	31 19	26 16	7 11	31 19	30 21	26 16	31 9	29 10	29 12	31 8	33 4	33 5	30 4	31 22	31 22	24 18										
	㉑	8 1	32 28	15 6	20 4	30 2	9 4	20 4	19 4	30 2	45 29	47 44	47 41	44 28	40 3	40 2	39 4	20 4	20 4	36 4	28 9									
以類	㉒	4 4	1 0	5 1	6 1	4 2	4 4	6 1	6 1	4 2	3 5	3 2	3 2	3 1	4 1	4 1	5 0	6 1	6 1	2 2	6 2	3 2								
	㉓	8 1	31 29	16 5	19 6	29 5	7 5	19 6	19 6	29 5	42 25	46 38	46 40	43 27	38 2	38 3	38 4	18 6	18 6	38 8	28 10	46 38	4 2							
	㉔	8 16	17 7	25 22	42 41	32 34	7 22	42 40	41 39	32 34	23 3	21 4	21 6	22 6	23 9	23 10	24 20	40 37	40 37	17 39	32 17	21 4	7 1	22 7						
	㉕	9 15	16 7	26 26	42 38	31 33	10 20	42 39	43 44	31 33	21 3	19 4	19 6	22 7	22 10	22 11	22 11	24 43	43 43	17 37	30 20	19 4	7 1	25 6	42 37					
	㉖	9 14	17 8	27 21	41 35	32 31	9 20	41 36	41 36	32 31	22 4	20 6	20 8	23 8	23 8	23 9	24 11	40 36	40 36	17 34	33 18	20 38	7 1	20 7	42 34	42 36				
夷類	㉗	6 2	8 1	14 3	22 2	17 2	7 0	22 2	19 2	17 2	11 0	10 0	10 1	11 1	11 1	11 1	12 1	21 2	21 2	10 2	15 1	10 0	3 1	10 1	22 1	21 2	23 2			
	㉘	6 2	8 1	14 3	22 2	17 2	7 0	22 2	19 2	17 2	11 0	10 0	10 1	11 1	11 1	11 1	12 1	21 2	21 2	10 2	15 1	10 0	3 1	10 1	22 1	21 2	23 2	44 44		
圮	㉙	4 4	7 1	7 3	12 4	11 4	5 1	12 4	12 4	11 4	7 1	8 1	8 3	6 2	7 1	7 2	7 1	12 4	12 4	9 4	7 3	8 2	3 2	7 2	10 3	12 4	12 4	10 5	10 5	
意	㉚	9 5	6 0	8 5	7 5	6 6	6 0	7 5	6 6	6 6	7 4	6 3	6 2	8 2	9 6	9 5	6 6	6 6	6 6	4 5	7 1	6 2	4 2	6 1	7 5	5 6	6 4	4 1	4 1	4 1

※⑩～⑬㉑㉓㉙は四七部立であるから、これら相互の一致数が44を超えることがある。
※㉔は落丁があり、メ部の一致数は知られない。
※㉗～㉙の比較は、言語門における一致数とした。

による早引の分類は、その有効性に疑問があり、矛盾する場合まであるようなのである。

また、一致数が二〇代程度のものであっても、最初の数部、あるいは最後の数部が一致する（あるいは、一致しない）という現象も多く認められた。たとえば、同類同士の場合、一致数二四の⑯と⑱とで一致のみられた部は次のようである。

イ・ニホ・ヌルヲワカヨ・レソツネナラムウ・ク・マ・コ・ア・サ・ユ・エ（・は途切れを示す。）

また、異類同士の③と㉕（一致数二六）では、次のとおりである。

ロ・リヌル・ワカヨ・レソツネナ・ムウノクヤマケフ・サキ・メ・ヒモ・ス（同）

このことは、改変の在り方が、一つのブロック（連続する数部の集まり）ごとになされたことを思わせる。つまり、あるブロックについては改変し、他のブロックについては改変しないような編集方法が想定されるのである。このことは、同類の場合と異類の場合とを問わず、比較した本に何らかの関係――原本とその改編本・祖本の共有など――があることを予想させる。この例も、冒頭語による分類の有効性に疑問を抱かせかねない事例と考えられよう。

また、同類の本同士で、一声の一致数と二声の一致数とが大きく異なる現象にも注意したい。たとえば、伊類の⑭早引節用集・⑮早引万代節用集・⑯万世早引増字節用集と、同じく伊類の⑩嘉永早引節用集・⑪早引節用集・⑫真草両点早引節用集・⑬早引節用集との一致数は、一声で極めて高いが、二声では一桁に過ぎない。若干の差こそあれ、類例は多いようである。

したがって、改変意識を強調するのに冒頭語の改変を利用しうるという立場は、冒頭（狭義）の語が一致する（＝同類）にもかかわらず二声冒頭語での一致数が低いのだから、早引においては成り立たない場合があることを示唆していよう。また、一方では、同類ではあっても、二声本文が別のものによっている可能性をも想定させよう。

以上のように、冒頭語による分類は、その有効性の及ぶ範囲が極度に限定されたものと思われる。また、冒頭語による分類自体、矛盾のある場合も考えられるのである。

以上、この節においては、従来の分類とその理論的根拠が、早引においては適用できないと思われることを述べたにとどまる。次の節では、早引本文の相違をより反映していると考えられる分類を提示し、従来の分類との比較を試みることとする。

三　本文の相違による分類

まず、早引本文の系統研究に資する分類の条件を考えてみたい。

はじめに、どのような部分に着目することが必要かを検討しよう。節用集の内容を改変するのに最も単純で容易なものは、原本の本文に語を追加することであろう。すなわち増補である。山田忠雄氏は、古本節用集の増補の有り様について、原本の本文を尊重する傾向を持つ編者は、門の末尾や門内の意義群末・門の冒頭に増補して、原本の本文自体をみだりに改変しない傾向があるといわれる。[4] つまり、原本との異同が現れやすいのは末尾や冒頭であり、より改変されにくいのは核となっている原本の本文ということになろう。したがっ

て、末尾や冒頭にのみ着目する分類は、本文すなわち連綿と受け継がれてきた核の部分の異同を見落とす場合があると考えられる。この可能性は前節でも垣間見たとおりである。とすれば、このような分類に基づく限り、本文の系統研究は成り立ち得ないものとなってしまう。したがって、核の部分に注目することが、早引本文の系統研究に資する分類の第一条件であり、他の特徴に優先して検討すべきものと考えられる。[5] 具体的には、「声」の末尾や冒頭でない部分、さらに「部」に拡大すれば、一声よりも二声・三声、十声までの早引なら九声・八声などの部分に着目することが必要であると考えられるのである。

次に、本文の異同をどのような点に見出すかを考えてみよう。早引は、イロハ順と「声」との二重検索を採用している。が、これだけでは求める語が得にくい場合があると思われる。そこで、何らかの方法で各声内部の語を配列することが考えられる。このことは、従来の節用集が、言語門の語を配列する際に種々の試行錯誤を行ってきたこと[6]からも容易に想像されよう。その中では、頭字（漢字）が同じ語を一群とするのが一般的のようであるから、早引においても同様の配列をとる可能性が大きい。そして、早引が従来の節用集（第二検索に門を採用した節用集）から改変されたという想定に立てば、初期の早引ほど門で区切られた語群が一群となってしまい、頭字の共通する語が一群になりにくくなることが考えられる。逆に、後の早引ほど門の影響は薄れ、頭字に着目した配列がより徹底するものと思われる。また、山田氏は、古辞書の親近関係の証明には、収載語の位置（語順）を比較することが肝要であるとされている。[7]

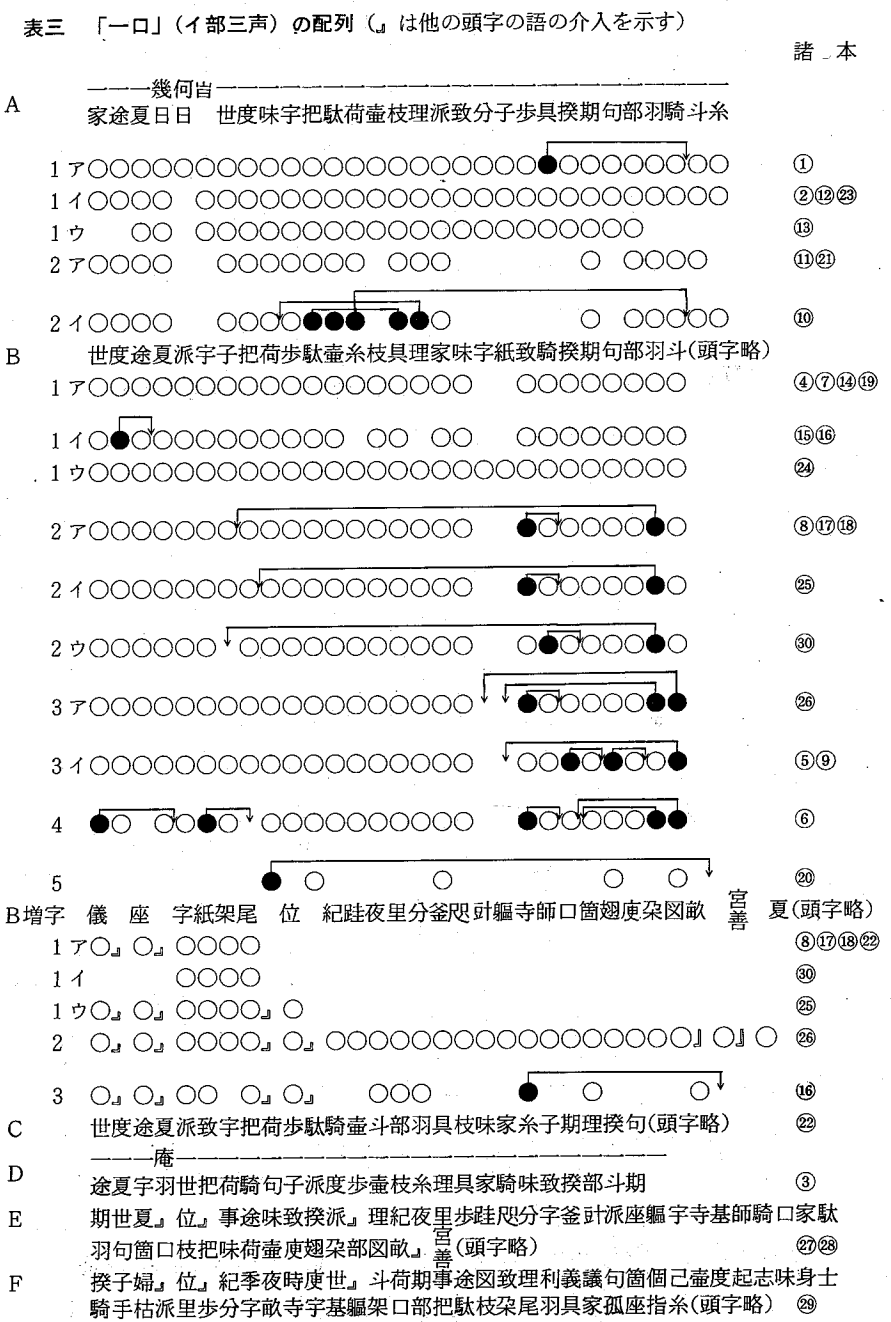
したがって、たとえ頭字の共通する語が一群になる本であっても、親近関係が深ければ収載された一語一語の順序は似かよい、浅ければ異なったものとなることが予想される。

以上のことから、早引本文の系統研究に資する分類は、「部」や「声」の冒頭・末尾でない部分の、頭字が共通する語の配列に着目することになるのである。ここでは、さらに、量的に扱いやすいという条件を課して、イ部三声の「一」を頭字とする語（以下、「一□」と記す）の配列により諸本を分類していくこととする。なお、イ部は、本全体の冒頭部分でもあって、他部に比して大幅な改変がなされる可能性もなくはない。そこで、同様の条件を満たすフ部三声の「不」を頭字とする語（以下、「不□」）の配列をも調査した。

早引諸本におけるイ部三声「一□」の配列の異同は、表三の通りで、A～Fの六類に大別される。これら六類は、語は共通しても配列の異なりが十語以上の場合に別類としたものである。なお、A～Fは、おおむね各類内の最も早い版行の本の刊年順に与えたものである。このうち、B類の本の中には増字（増補）を立てるものがある。この部分の配列は「B増字」として示した。ただし、この中には、増字の表示を持たないが、語の配列が他本の増字と近似している本も含めた（たとえば⑳など）。

AとB・B増字の初めに掲げた配列は、各類諸本の語の配列を、最も共通するように調整したものである。これを基準として、AとB・B増字を細分することとした。語の収載が認められその位置も基準に同じ場合は白丸で示し、語は収載されるが位置の異なる場合には黒丸とし矢印で位置を示した。空白は当該語が収載されないこ

表三　「一口」（イ部三声）の配列（』は他の頭字の語の介入を示す）



表四　「不口」（フ部三声）の配列（頭字略。』は他の頭字の語の介入を示す）

		諸本
a	礼　興　吉忠孝幸便敵乱肖埒慮弁覚学断動審思議縁宣足参実易通用出来日	
1ア○』	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○	①㉓
1イ○』	○○○○○○○○○○○○　○○○○○○○○○○○○○○○	②
1ウ	○○○○○○○○○○○○　○○○○　○○○○○○○○	⑫
1エ○』	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○○●○	⑪㉑
2　○』○』	●○　○○○　○○　○　○○	⑩
3	』○○○　○　●●●●●●●●●●●●●	⑬
b	通　忠孝幸覚足敵便肖埒弁易学慮縁実断審運思議出来	
1ア	○○○○○○○○○○○○○○○○○○　○○	④⑥⑧⑭～⑱㉔
1イ	○○○○○○○○○○　○○○○○○　○○	⑤⑨
1ウ	○　○○○○　○○　○　○○○　○○	⑳
2ア	●○○○　○○○○　○　○○○○○　○	㉚
2イ	●○○○○○○○○○○○○○○○●○　○○	㉒
3	○○○●○○○○○○○○○○○○○○　○○	㉖
4　○』	○○○○○○●○○○　○○○○○○○○○○○	⑲
b増字	双　同平惕婬犯例　増減退転当才敏敬法通参　日落離　宣　塩悉堪聞念功道　教	
1ア○』	○○○○○○○○○○　○○○　○○○』　○	⑧⑰⑱㉕
1イ○	○○○○○○○○○○○○○○○○○○○　○○	㉒
1ウ○	○　○　○○○　○○○	⑳
2　○』	○○○○○○○○○○　○○○　○○○』　○』○』　○○○○○○』○	⑯㉖
3	○○●○●●　○　』　○　○』	㉚
c	出来忠孝幸足便肖敵覚慮弁埒実断審縁思議吉	⑦
d	忠孝足参幸便敵肖埒慮弁覚思議縁宣実易通乱日出来断審	③
e	日』肖侫』例仁』借』幸審宣悉一平教学惕敵孝忠実敏通参弁堪足増減易断便見聞退犯淫慮思議念巧道』通	㉗㉘
f	動』日』惜』死身例』肖運真実幸明信審参仁作宣侫平教学文孝受退忠正敏通足敵断易便犯慮思議念覚得手埒貞弁縁出来法同仝才能窮朽乱	㉙

表五　両分類の対照

「一□」	「不□」	山田	諸本
A 1ア	a 1ア	位	①
1イ	1ア	以	㉓
1イ	1イ	位	②
1イ	1ウ	伊	⑫
1ウ	3	伊	⑬
2ア	1エ	伊	⑪㉑
2イ	3	伊	⑩
B 1ア	b 1ア	位	④
1ア	1ア	伊	⑭
1ア	4	伊	⑲
1ア	c	位	⑦
1イ	d 1ア	伊	⑮
1ウ	1ア	以	㉔
3イ	1イ	位	⑤⑨
4	1ア	位	⑥
(増字)	(増字)		
B 1イ　B 3	b 1ア　b 2	伊	⑯
2ア　1ア	1ア　1ア	位	⑧
2ア　1ア	1ア　1ア	伊	⑰⑱
2イ　1ウ	―　1ア	以	㉕
2ウ　1ア	2ア　1イ	意	㉚
3ア　2	3　2	以	㉖
5　―	1ウ　1ウ	伊	⑳
C　B 1ア	b 2イ　b 1イ	以	㉒
D	d	位	③
E	e	夷	㉗㉘
F	f	圮	㉙

とを示している。こうして示した諸本の異同をまとめたのが番号で標示した細分である。そして、諸本のすべての異同を示したのが記号で標示したものである。したがって、これらの番号・記号は、諸本間の系統関係の検討を経ずに仮に付したものである。

A～Fのうち、第三検索法に門を導入しているE・Fは別として、他の頭字を有する語が介入するか否かに着目すれば、高度の編集（門の影響が薄く、その意味で早引らしい編集）がACBの順に見られると言えよう。[8] が、語の配列を見る限り、ACBが書承の関係を保ちつつ逐次改編されたかどうかはにわかに断じがたい。

「不□」の調査結果は表四の通りである。表示のしかたは「一□」の場合にならった。ただし、a6は、十語以上の語がa類諸本の配列と異なるが、基準とした語の配列を保存しているとみてここに入れることとした。なお、「不□」の英字記号（小文字）は、cを除いては、「一□」と共通させた。すなわち、Aとa、Bとbなどの諸本は、ほとんどが一致して分類されるように配慮した。

さて、この「不□」による六分類と「一□」による六分類とで諸本の分属の有り様を見、本稿の分類を検証することとしたい。

「一□」六分類と「不□」六分類とが異なるのは、二本に過ぎなかった。⑦懐宝数引節用集は、「一□」でB類に分類されるが、「不□」ではcという、他に見られない配列を取っている。また、㉒万寿早引節用集は、「不□」でb類、「一□」増字も「不□」増字も他のB類の本と似た配列をとっている。が、「一□」に限ってCとい

う独自の配列を有しているのが知られる。これら二本については、今後、他の語群を調査することで、分類上の位置をより明らかにしうると考えられるが、いま、これ以上触れないこととする。

また、細分類（数字とカナで表したもの）のレベルにまで比較の範囲を広げると、両分類の一致の度合いはかなり低くなる。これは、「一□・不□」のそれぞれの細分類が、調査した本のすべての配列を示すものであるため、諸本間の異同の幅が大きくなったことによるのであろう。もちろん、この異同の有り様をより多くの基準で捉え精緻な検討を経ることで、諸本の系統関係・成立過程を解明することができるといった側面も有していると思われる。したがって、これら「一□・不□」による分類は、細部においては検討の余地があるものの、おおむねは妥当であると考えられよう。

さて、本文の異同を反映すると考えられる分類の大要は以上のようである。次に、冒頭語の分類と比較していきたい。

両分類を突き合わせた表五をみられたい。A類には位類（二種）・伊類（五種）・以類（一種）、B類には位類（五種）・伊類（六種）・以類（四種）・意類（一種）、D類には位類（一種）があることになる。したがって、本稿の六分類と冒頭語の六分類とは、一対一の対応が見られず、その意味で一致しないものと考えられる。もちろん、A類には伊類が対応しそうであるといった傾向のようなものは見られるが、冒頭語の分類を傍証する事実とはしがたい。冒頭語の分類によるかぎり、本文の異同を無視しかねないことになるからである。

が、その一方では、E類は夷類に対応し、F類は圯類に対応していることも認められる。しかし、これも、冒頭語の分類を傍証する事実としては認めがたい。なぜならば、この二類の本は、他の早引とは異なる特徴を有しているからである。たとえば、他の早引は「部・声」の二重検索であるが、この二類の本はさらに「門」を設けるものである。また、E類本は、用字の出典注を施すことがある特異な早引である。このようなことから、E・F類の本は、他本とは異なる特徴・本文を有すると予想され[9]、そのために両分類が一致する結果となったに過ぎないと考えられるのである。

以上に見るように、冒頭語による分類と本文の異同を反映した分類とは齟齬するものであることが明らかとなった。したがって、冒頭語による分類は、早引本文の系統研究に資する分類であるとは考えにくいと思われる。少なくとも、本稿で提出した分類の方が、分類基準を目的に合わせて設定した点でも、早引本文の系統研究には有用であると思われるのである。

おわりに

以上、早引の冒頭語による分類と、早引本文の相違を反映していると考えられる分類とを比較した。その結果、両者において食い違いがあることをみてきた。そして、この検討を通して、早引本文の系統研究に資する分類の在り方も指摘することができたものとおもう。が、未だ検討の及んでいない事項も多い。

分類の基準は、任意の一本の分類上の位置が一見して分かるものが研究上便利であり、その意味では理想的であるとさえ言える。この要請については、本稿では十分な回答をしていない[10]。

また、調査できなかった本の中には、早引の最初のものと思われる『宝暦新撰早引節用集』（宝暦二年序。『目録』による）や以類の最初の本『早引残字節用集』（天明五年刊）などといった、見逃せない本もある。今後、これら未見の諸本をも加えて、論述をより充実したものとするのも、筆者の重要な課題の一つである。

また、本稿では、可能な限り諸本を見、また、俯瞰を意図したため、個別的な検討はできなかった。今後は、諸本間のさらに具体的な比較・考察を基礎とし稿をなすことも重要な課題であると思う。

注

（1）なお、文献4（二九一頁）によれば、「威」類本も発見されたようである。

（2）文献3には「起首の増補・改変がなにゆゑに部末のそれに優先すべきものとかんがへられるか？　それに対するこたへは容易である。（中略）なにかをくはへたといふことを一目瞭然他にしらしめるためにはそのもののまんまへにおくにかぎる。このやうな心理が増補者の脳裡を支配することはきはめて自然のいきほひである。（中略）この部分にこそ編纂従事者のもっとも積極的な改変的意図を徴することができるものとおもふ。勿論、そのためには前提作業として各本の適正な照合による基幹部の確認をおこなふことが必須である。」とある（一一四頁。分かち書きは改めた。なお、「部」は本稿の「門」にあたる。以下同じ）。また、例として古本節用集の三大別を挙げられる。が、早引について「基幹部の確認」がなされたか否かは不明である。

（3）注2参照。

（4）文献3には、「通例、辞書の語順において注目されるのは部末の増補である。一見無秩序にみえる先行書の排列に敬意をはらふとなれば、不可解のゆゑにこれを無視し、これをバラすといふ態度は古人のとらざるところであった。不可解なるものはわれ信ずではなくして、われこはさずといふのが古人の信条であったらしい。古辞書の排列をみださずに今日につたへた最大の因はみぎの一事にあるとおもふ。そのやうな心的傾向をもつひとたちは増補の必要があるばあひには謙虚に部末にかきいれる方法を一般的にとった。また、まれに意義群を発見できたひとはその群末にくりいれた。」とある（一一三頁）。また、冒頭の場合については注2を参照。

（5）山田氏も注2のように基幹部の確認が必要と言われる。

（6）たとえば、『新増節用無量蔵』（元文二年刊）では仮名第二字のイロハ順で配列し、『増字万倍万代節用字林蔵』（寛政七年刊）では単字を前に出し、『大広益新改正永代節用無尽蔵』（天保二年刊）では訓読みの語から配列している。以上の知見は『目録』による。なお、筆者も当該本もしくは再版本等により確認した。

（7）文献3では、「しかしながら、問題は考察の対象を量的に増やしさえすればよいといふのではなくして、むしろ一定量以上の語彙について、これがおかれた位置を凝視することがもっとも重要にして核心にせまりうる方法として要請されるので

ある。」といわれる（一一一～一一二頁）。

（8）なお、E・F類は他の頭字の介入が多いように記してあるが、これは、両類の本が第三検索に門を導入しており、その境界と一致するためである。

（9）また、筆者の調査では、㉗㉘は『書言字考節用集』（享保二年刊）との関わりが強く認められた。他の、たとえば『増補改正早引節用集』などは、言語門を最初に据える『蠡海節用集』（延享元年序）との関わりが認められた。これらの詳細については別稿に譲ることとする。

（10）なお、イ部一声の収載語数・イ部二声の冒頭語・部の数・増字の有り様などを検討したが、本稿の分類と一致することがなかった。

参考文献

1 上田万年・橋本進吉『古本節用集の研究（東京帝国大学文科大学紀要　第一）』　東京帝国大学　大正五年

2 山田忠雄『開版節用集分類目録』　昭和三六年

3 同　『節用集天正十八年本類の研究』東洋文庫　昭和四九年

4 同　『近代国語辞書の歩み――模倣と創意と（上下）』　三省堂　昭和五六年

（東北大学文学部助手）

前　集　要　目

特集・兼好と徒然草

二十年にして再び兼好書状を考える……林　瑞栄
――徒然草の土壌――

兼好の自然観と人間観をささえたもの……安部　元雄

兼好の文芸意識……生田　勝彦

兼好における自然……阿部　武彦

『徒然草』の文章試論……遠藤　好英
――文末表現から――

長明の眼……鈴木　則郎
――『方丈記』のリアリティーをめぐる覚え書――

『道草』論……加藤　二郎
――虚構性の基底とその周辺――

太宰治『ダス・ゲマイネ』一面……千葉　正昭
――感情表現の意味――

〔書　評〕

林水福著『讃岐典侍日記研究序説』……石坂　妙子

〔新刊紹介〕

日本文芸研究会　研究発表会発表要旨

文芸研究第一一五集
頒価　八五〇円
（送料別）
昭和六十二年五月十五日印刷
昭和六十二年五月三十一日発行
発行人　片野達郎
印刷所　（株）仙台共同印刷
電話　二三六―七一六一
仙台市川内
東北大学文学部
国語学国文学研究室内
発行所　日本文芸研究会
電話（222）一八〇〇　内線（二五〇三）（二五〇六）
振替　仙台六―一四三七番